

日本災害看護学会 先遣隊活動報告

4月17日（日）の活動

活動者：山崎達枝・三澤寿美・西上あゆみ・末永陽子

当日の状況（2016年4月16日～17日）

4月16日夕方より小雨がぱらつき、夜には大雨が降ることが予想された。深夜に強風が吹いたが、4月17日朝には、天気は回復し、日中は晴天であった。夜間、日中とも、前夜のような大きな地震はなかったが、小さな余震は続き、緊急地震速報もたびたびあった。

1. 行程ならびに訪問先

- 8:00 ホテルを出発 山崎・西上・末永レンタカーにて熊本市内に移動
(途中、差し入れ物品購入)
- 10:20～12:50 熊本大学医学部保健学科看護学専攻、本荘体育館
- 13:30～14:30 熊本市内避難所①訪問(中学校)、三澤合流
- 14:00～ 山崎・末永班と三澤・西上班の2班に分かれて活動。

1) 山崎・末永班

熊本日本赤十字病院にある災害派遣医療チームの広域搬送拠点臨時医療施設本部を訪問

- 阿蘇方面
- 高尾地区公民館
- 阿蘇工業団地 JDEVICES
- 阿蘇総合グラウンド 新小屋区

2) 三澤・西上班

- 15:30～16:00 熊本市内避難所②訪問(小学校)
- 16:40～17:30 「グランメッセ熊本」訪問
- 20:00 山崎・末永班 荒尾市内ホテル到着
- 23:00 三澤・西上班 荒尾市内ホテル到着

2. 活動内容

1) 荒尾駅近辺のスーパーで支援物資(飲み物・日持ちがする主食・嗜好品)を購入し、現地に赴く(玉名市近辺では、コンビニでは前期支援物資は売り切れ、または品薄状態

であった)

2) 熊本大学医学部保健学科看護学専攻、本荘体育館訪問

本荘体育館に在中していた教員（看護学専攻）ならびに被災された方々（避難所の運営のリーダーを行っている消防団長さんを含む）から、当時の状況から現在までの経過について話を聞く。

現在、体育館に在中している看護職は熊大の教員達のみであり、住民の健康相談を受け、市役所に薬を受け取りに行くなど、医療看護活動を担っている。熊本大学学生（看護学専攻学生含む）も体育館における支援を手伝っており、名簿づくり・衛生管理・保健指導・高齢者のトイレ介助を行っている。

体育館は、天井の落下、ならびに今後も落下物の危険性があるため、使用禁止となっていた。1階の一部と、ホール、2階を人々は利用している。また駐車場には、車内宿泊者がいる。

自治消防団によるテントを設営し、炊き出しの準備を行っていた。炊き出しの物品は、避難してきている住民の方を中心に集められたとのことであった。被災された人々は、前夜の強風時はテントが何度か飛ばされそうになることもあり、これを守るため夜間はあまり眠れなかったと話された。

3) 熊本日赤病院にある災害派遣医療チームの広域搬送拠点臨時医療施設本部を訪問

駐車場にはDMATのステッカーをつけたDr Car、救急車が駐車されていた。熊本県内の避難所数と人員、健康管理について情報を得た。4月16日は、500名以上の傷病者を受け入れ、そのうち、赤タグをつけられた傷病者が30名程度であった。多くは、緑タグで整形疾患であった。透析は17日から実施開始となっている。

4) 熊本市内避難所①訪問（白川中学校）

避難所となっている中学校を訪問した。熊本市の職員・教員（養護教諭）・被災された方々に話を聞く。また被災されている方で、炊き出しのボランティア活動を行っている住民さんもいた。

18日までは休校により、施設は利用可。それ以降については未決定である。徳島日赤から救護班として巡回があった。2名（パーキンソン患者）の受診希望があった。電気はきているが、断水のため、水の確保が難しい。新生児がいたが、沐浴のために車で30分のところに通っているとのことであった。

阿蘇医療センターを目指すが途中で、道路の陥没。亀裂が数か所あり通行不可にて断念する。

5) 高尾地区公民館訪問

公民館も雨漏りにより水浸しであったが、調理場は使用でき、地域の女性3名が炊き出しの準備を行っていた。自宅は物が倒れ、昨日の雨による雨漏りにて戻れず、車内で夜を明かしていた。2回目で家が崩れたとのことで、その時の恐怖について訴えていた。

6) 阿蘇工業団地 JDEVICES

会社の再建のために職員も被災者であったが集まり復旧に向けて作業していた。

7) 阿蘇総合グラウンド 新小屋区

新小屋区長が中心となり、炊き出しの準備を行っていた。トイレがあるからいいものの、電気・水道が来ていないことに不自由され、電気が通った避難所から借り入れた発電機が準備されている途中であった。

8) 熊本市内避難所②訪問

避難所となっている小学校を訪問した。途中、住民の方々は、給水車に並んでいた。この地区に住み、避難所でボランティア活動をする2名の看護師から話を聞いた。熊本大学の医師の呼びかけにより、この避難所には、ボランティアとして看護師が6名、医師が3名来ていた。休憩や自身の仕事を調整する中、訪問時は2名の医師とこの地区に自宅があり自らも被災した2名の看護師が避難所で被災者の医療・健康相談をうけていた。打撲の手当、子どもの発熱が見られたとのことであった。避難所の被災者の年齢構成は特に偏りもなく、こどもも多いとのことであった。中には遠方からこの地域に来ていた時に被災し、薬が切れたことを相談に来られたケースもあり対応した。熊本大学の医師の指揮のもと、65歳以上の人と子どもの聞き取り調査が行われた。ここでは、地域住民の寄付による栄養バランスの良い炊き出しも行われていた。支援物資のほか持ち寄られた衛生材料や市販薬など、現在は不自由がないとのことであった。

話を伺った看護師2名は、どちらもこれまでに災害看護経験がないとのこと。しかし、6名の看護師で、勤務表を作り、薬や衛生材料がおいてある場所を交代で担当できるようにシフトを組んでいると言われた。トイレは数が少なく、水が出ないという不便はあるが、小中学生が川の水を汲んでバケツをトイレの近くにおき、流せるように工夫していた。現在はまだ、不眠・ストレスの訴えはあまり聞いていないとのことであった。炊き出し等を主体的に行っている住民ボランティアとボランティア看護師が連携し、円滑な避難所運営が行われている印象であった。

9) グランメッセ熊本 (益城町内にあり)

これまでに訪問した避難所での話から、被災された方々が多いと話題にあがっていたグランメッセ熊本を訪問し、この施設の管理者の方にお話を伺った。施設自体は、14

日の地震の時は、やってきた被災者さんを施設内に入れ、避難所対応をしていたが、16日の地震で施設内のガラスの離散、天井の崩落があったため、立ち入り禁止となった。もともと、避難所ではないが、2200 台の駐車スペースがあり、多くの方が自家用車で避難してきた。訪問時も 8 割以上はうまっているような様子で、夜間に戻ってくるつもりの方もいるのか、駐車スペースに私物を置いて場所取りをしているところもあった。16 日の大きな地震によって一時は駐車施設からあふれるほど車があり、多くの被災者が車内避難していた。

施設は、益城町内にあり、当初は益城町民と思われたが、現在は隣接する熊本市からの被災者もいるようであると話された。もともと、避難所と指定されていない場所のため、備蓄はしていない。立ち入り禁止になるまで使用してもらっていた施設内のトイレも使用できなくなり、近くの避難所のトイレを使用して貰ったり、自衛隊と協力して敷地の隅にトイレ用の穴を掘ったりして対応するような時もあった。訪問時は、10 基の仮設トイレが置かれていた。避難者人数に対してバキュームが間に合うか心配しているとのことであった。

自衛隊による給水もあるが、避難所が増えたため、給水車が間に合わなくなってきていた。バナナ、菓子の配給が企業等の寄付で行われていた。近隣には数カ所の避難所があり、十分に食糧が配布されている状況とはいえないとのことであった。昨夕、医療チームが視察にきたが、救護所を開ける状況になく、大きなホワイトボードに最寄りの救護所の場所が掲示されていた。

3. 健康問題

ノロウイルスが出た避難所があったと聞いた。どの施設でも車いす・高齢者が目立った。中には、車いすで夜を明かした被災者もいた。早急に福祉避難所の立ち上げを市役所の職員にお伝えた。

トイレ不足があり、断水の影響で、自身で用を足した後に水を流さなければならない車中に避難している被災者が多い。食料、水が不足傾向にあり、避難所によるが炭水化物が中心となっている

避難所で看護ボランティアをされている方達自身が被災者であり、睡眠状況についてお聞きすると不眠と言うよりも、強風や余震への心配などから長く寝られるような心境でないとのこと。

4. 課題

市役所の職員に福祉避難所の立ち上げについて伺ったが、福祉避難所が立ち上げはこれからの様子であった。避難所のある学校等で車中泊の被災者さんに出会うことはこれまでの被災地でもよく見られたが、「グランメッセ熊本」のように、**避難所でない場所に多くの被災者が集まり、車内生活を行っている人々への対応が必要。**

5. その他

区長等のリーダーがいるとコミュニティの結束が強く、支給がなくとも、被災された方がたの持ち込みの食料等で炊き出しなどが行われていた。リーダーは、被災された住民が生き抜くために大切なことは自助ではなく、共助だと涙ながらに訴えていた。また避難所にいる人々と、駐車場で過ごされている人々とに分け隔てなく食事の提供をするようにしたところ、車で過ごしていた人々も家にある食材を提供するようになったと。公からの配給も十分でない中、人々が自宅の食料を持ち込み、炊き出しを行ない、支え合っていた。